

No. 519【2022年8月26日配信】

漂着アマモを活用した塩づくり その1 (担当:児玉大成)

こんにちは。文化遺産課の児玉です。海水浴場などの砂浜の波打ち際には、アマモなどの海草が大量に漂着していることがあります。これは、その周辺に魚やエビ、カニ、イカなどの生息場所や産卵場所となる「アマモ場」の存在を示唆しています。

アマモの民俗学・考古学的視点での活用方法をみると、デンマークのレス島や中国の山東半島沿岸部などで、民家などの屋根葺き材としての使用が認められます。また、アマモには、直径2~3ミリメートルの白い渦巻状の物体が付着していることが多く、これはウズマキゴカイと^{せいかん}いうゴカイの仲間の巣となっている「棲管」です。石灰質のため燃えにくく、縄文時代後期以降の塩づくりに関する遺跡・遺構から、焼けたウズマキゴカイの棲管が出土することから、アマモなどの海草を焼いて、その灰で塩を作っていたことが考えられています。

漂着したアマモについては、一部は肥料として活用されているものの、ほとんどは放置もしくは廃棄されていると思われませんが、今回は、この漂着アマモを活用した塩づくりについて、実験考古学的に紹介したいと思います。

はじめに、^{かんすい}鹹水を作ります。鹹水は、濃い塩水のことです。今回は、塩分濃度の目標を15%程度とし、8月13日から18日にかけて行いました。使用した漂着アマモの量は、90リットルのポリ袋で4個分です。

- ①まずは、海水の塩分濃度を計測します。結果、3.0%でした。
- ②次に、2つのバケツに各14リットルの海水を入れ、アマモを丸一日、漬けておきました。塩分濃度は4.0%を測りました。
- ③上記②のアマモを取替え、翌日、塩分濃度を計測。結果、4.0%を測りました。
- ④上記③と同様にアマモを取替え、翌日、塩分濃度を計測。結果、4.2%を測りました。バケツの中の海水は、アマモを除去した時点で11リットルまで減少(バケツ2個分で計22リットル)し、色は褐色を呈していました。また、使用したアマモの量は、90リットルのポリ袋で1個分を使い切りました。

まだまだ、塩分濃度が低い状況となっていますが、続きは次回紹介します。



海岸に漂着したアマモ



海水に漬けたアマモの状況